フィルム・コメンタリー 11月4日号

- 映画時評 新作と古い作品との間で-

■キャスリン・ビグロー『ハウス・オブ・ダイナマイト』（2015)

■シドニー・ルメット『未知への飛行』（1964）

注）今回採り上げた日本の作品に付きましては、レヴューする上でどうしても結末についての記載をせざるを得ない状況でした。ご理解いただきご注意くださいますようお願いします。

キャスリン・ビグロー（1951~ ）の提示した問題作と呼べるでしょう。何の前触れもなくアメリカに向け核ミサイルが発射されます。どこの国のミサイルか、またどこから発射されたのかも不明なまま、いきなりアメリカは危機に陥ります。500億ドルかけて設置された迎撃ミサイルによる攻撃も失敗に終わりアメリカ大統領は重大な決断を迫られます。その決断とは、ミサイル発射の可能性のある国家を含めた複数の国々の主要都市への報復攻撃か（どの都市を攻撃するかのいくつかの選択肢があります）もしくは何ら攻撃を行わず被攻撃都市とされるシカゴの全滅を容認するかという選択です。ここでは、報復しないのは降伏を意味するという論理が成り立つものでもあります。核戦争による世界の破滅の危機が一刻一刻迫る中で、さてアメリカ大統領の決断は、という究極の大問題です。

キャスリン・ビグローは、この緊急事態をホワイトハスのシチュエーションルーム、アラスカのフォート・グリーリー基地、ネブラスカのオファット空軍基地、ペンタゴンなどの複数の危機管理に関する中枢となる場での活動をそれぞれ克明に描いて行きます。もちろんホワイトハウスから出先にいた大統領に最終的に焦点が当てられます。現在の国際情勢を頭に入れれば、決して起っても不思議ではない出来事ですが、核兵器配備という前提のもとでのバランスの均衡は、実に脆い地盤の上に建てられた構造物のようなものであり、今まで何ごともなく過ぎてきたことが単なる幸運に恵まれたことででもあるかのように思えます。

キャスリン・ビグローはこれまで『ハート・ロッカー』（2008監督賞を含む6部門でオスカーを獲得）『ゼロ・ダーク・サーティー』（2012）『デトロイト』（2017）といった戦場や国内の暴動といった極めて緊急事態的状況をリアリズムの中で表現することの多い監督であり、その姿勢は単にコマーシャリズムに則ったものとは異なり、社会性とアメリカという大国の世界でのスタンスに拘ってきた色彩の強い人です。2009年には「自分の適性についてかなり時間をかけて考えてきましたが、メディアを探求し、押し広げることこそが適性だと確信しています。ジェンダーロールやジャンルの伝統を破ることではありません」という発言を残した人物でもあります。これは、一つの問題提起であり、大統領が如何なる決断を下したのか、観客のイマジネーションと思考力に委ねた啓蒙的作品と考えられるのではないでしょうか。重苦しいまでの緊張感がひしひしと迫ってきます。

そして、本作を見ているときに筆者の頭をかすめたのは同様のテーマを扱った、松林宗恵『世界大戦争』（1961）であり、スタンリー・クレイマー『渚にて』（1959）でありスタンリー・キューブリック『博士の異常な愛情 または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』（1964）ですが、こうした作品以上にシドニー・ルメット『未知への飛行』（1964 原題『FAIL SAFE』）のことが気になりました。この作品の原題『FAIL SAFE』とは、装置やシステムが故障を起こしても危険な状態にならず安全な状態に移行するよう設計する考え方、つまり失敗（FAIL）しても安全（SAFE）を保つというものです。本作では、アメリカ空軍の爆撃機が水爆を積載したまま機器の誤作動によりモスクワへの水爆投下を命令されるというものです。そもそもの誤作動の原因はソヴィエト（当時はソヴィエトなのです）の妨害電波なのですが。一旦命令が出されれば、パイロットはそれに従い任務を遂行します。作品の中で、空軍の上層部から大統領から、また妻からの水爆投下を避けるための懸命の説得がなされますが、機長パイロットはがんとして受け入れることはありません。下された命令を成し遂げることを軍人としての本望とする頑強な決意が、この場合は裏目に出てしまうのです。アメリカの大統領とソヴィエトの書記長がホットラインで解決を探りますが、水爆搭載機の

撃墜もできず、アメリカ大統領は何とモスクワに水爆が投下されたらアメリカ軍の手でニューヨークに同じサイズの水爆を投下する決断をします。冷戦下での究極の決断がこうした大悲劇を生み出すことになりますが、本作の構成はほぼ密室の中での二大大国の首脳が通訳を通じて話し合う長いシーンが特徴的であり（これはホワイトハウスの地下壕）ペンタゴンの会議室、戦略航空軍団作戦会議室それに爆撃コックピットということになります。この作品もまた息詰まる緊張感に満ち、そしてラストではホットラインを通じて聞こえるモスクワの滅亡を意味する異様な金属音が響き、同時にニューヨークの滅亡も刻々と迫ります。報復しないことは降伏を意味するという『ハウス・オブ・ダイナマイト』での論理はここでは成立しないのです。大統領にはヘンリー・フォンダ、ペンタゴンのアドヴァイザーで、この機にソヴィエトの崩壊を強く主張する強硬派にはウォルター・マッソーを配した演技陣は実に充実しています。加えて優れた脚本、緊迫感を持続させる演出、強烈な反戦メッセージが批評家たちから評価されたものの、当時本作は興行成績が振わず、そのせいか日本での公開は1982年までのびのびになってしまいました。本作の公開された1964年は、スタンリー・キューブリック『博士の異常な愛情　または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』が公開された年でもあり、筋が似通っているとして訴訟にまで問題が発展したという話もあります。たしかにキューブリック作品もピーター・セラーズの四役というキャラクターの使い分けで演技者としての限界に挑み、また「おそらく20世紀最高の風刺映画」としての評価を得ています。この「風刺」の力と切れ味こそが魅力の作品であり、シドニー・ルメットとは一線を画す作品として大いに評価したいところです。

核兵器抑止力は、最終的には核兵器の使用を思いとどまるという極めて人間的な感情に訴える「恐怖の均衡」に基づいたものであり、この微妙で繊細で脆さを抱えたバランス感覚はいつ破綻してもおかしくないことをこうした作品群は警鐘を鳴らします。

「ハウス・オブ・ダイナマイト」では、2023年に公開された名作セリーヌ・ソン監督の『パストライブス/ 再会』に主演したグレタ・リーが国家安全保障局の北朝鮮専門家として顔を見せていることは筆者にとっては嬉しいことでした。